

令和元年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

刀がナ タニグチ イサオ
氏 名 谷 口 功

研究期間 令和元年度

研究課題名 長野と滋賀の街道文化と都市構造－日本酒の場所性からみる宿場の定性的研究－

研究組織

	氏 名	学 部	職 位
研究代表者	谷口 功	人間関係学部	教授
研究分担者	杉藤 重信	人間関係学部	教授
研究分担者	江崎 秀男	生活科学部	教授
研究分担者	宮下 十有	文化情報学部	准教授

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

2014～2018年度にかけて、長野県の酒蔵や宿場を巡り、宿場の機能や近世における酒造りの意味とその地域性を考えてきた。滋賀県も長野県同様に自然条件と歴史的条件によって宿場と酒造りが密接に連動する地域である。それぞれの宿場において酒蔵・酒造りの有する歴史的経済的意味、そして現在も残る歴史的景観（空間）がもたらす社会的経済的意味を検討する。そして、街道文化と都市構造を、日本酒の場所性という視点によって定性的に捉えなおす。

2. 研究の推進方策 (300字程度で記述)

私たち研究グループは、まずは現地を訪れて、それがどのような場所にありどのような人々がその地域社会の存立にかかわっているのか確認することを大切にしている。信州と同様に数多く存在する宿場の存立基盤に関して、商家（蔵元など）や祭りの担い手へのヒアリングや歴史的資料の収集によって知見を整理する。2019年度は、新たに滋賀県の湖北エリアの北国街道木之本宿と長浜城下街、湖東エリアの豊郷町（丸紅発祥の地）と愛荘町を訪れ、宿場や蔵元、商家の歴史を学ぶとともに、日本酒の場所性というものがどのように構築されているのか検討している。長野と滋賀の酒蔵と宿場を比較することにより、今日的な場所性を構成する生産的意味と消費的意味が明示的になる。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

長野県は、街道によって4つの文化圏(北信・中信・東信・南信)を有し、さらに蔵元は地理的自然条件によって10のエリアに分けられて地域的まとまりを形成している。これらのエリアをめぐってわかったことは、エリアごとの蔵元の関係性には地域的まとまりはあるが、造られた酒にエリア共通の地域性を見出すことは難しいということである。実際、長野県工業技術総合センター(食品技術部門)においても、水質や米の品種や酵母などの特質を科学的に分析することによって地域的特性を見出そうと試みているが、十分に有意な結果が得られていない。しかし消費者はそれぞれの酒に地域性を見出そうとし、また身体的にその「らしさ」を感じている。

一方、滋賀県は街道や地理的条件によって分けられた6つのエリアに36の蔵元があり(2018年)、近江酒という括りの中でそれぞれが独自性を追求している。琵琶湖にそそぐ豊かな水系は、良質な酒米を育てる環境をもたらしている。2006年には、文献に残るだけの存在であった酒米「滋賀渡船」を復活させた。酵母も県内の蔵元に生息する酵母菌200株余りを集めて、選び、かけ合わせたものが使われるという。テロワールへのこだわりを滋賀の酒造りには見出すことができる。

では消費者は、酒のテロワール性に象徴される日本酒の個性をどのように身体化するのか。食品科学的に証明が難しい地域性をどのように理解するのか。私たちが蔵を巡って得られたのは、その酒の個性・地域性は、呑む者がその日本酒の有するストーリーを受け入れたときに現れるという構築的経験であった。杜氏・蔵人・蔵元・酒屋が語る、蔵の歴史(地域の中での位置づけなど)、米、水、酵母などのストーリーを、消費者と共有したときに、日本酒の場所性が形づくられていくと考える。それは、小都市としての宿場の場所性が、どのようなストーリーによって構成されるのかとも関わっている。

4. キーワード (本研究のキーワードを1項目以上8項目以内で記載)

①日本酒	②場所性	③テロワール	④酒のストーリー
⑤	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

未訪問の滋賀県のエリア(湖西・湖南・甲賀・東近江)にて、場所性を構成する宿場や日本酒の「ストーリー」に関わるデータを収集したのちに、椋山多様性研究会、さらには東海社会学会での報告を予定している。また、2020年度の『人間関係学研究』に中間的な報告を執筆したい。